

兵庫県生物学会創立30周年記念 行状報告書

台湾研修旅行団記録



昭和51年7月29日（木）～8月4日（水）

< 7日間 >



大阪国際空港 1976. 7. 29

台湾研修旅行を終えて

団長 室井 緯

待望の台湾旅行も、7月29日から7日間にわたって行われた。旅に出て、随分様々のことを勉強したことで感謝いっぱいである。何しろ大学ノート1冊にびっしり記録をしたが、思い出の一部を書いておきたい。

29日午後2時、台湾着、両替のため土産物店に一同とともに着く。ここで様々のものを目新しく見学したが、その中で印象に残っているものは菊化木である。この菊化木が年輪でなくコルク層の蓄積物の模様であることや様々の標本というか茶受などを見せていただき、やはり本場で実物を見ることは有難い。

夕方、高雄について、土産物屋で大量の紋石岩を見学する。これは澎湖島の特産物で、古生代の微生物の化石の殻が一度とけ、その圭酸が二次的に結晶してできたものでNTで2400円、日本円で2万円という。愚妻のために最高のブローチを1個買う。旅に出てはじめての土産であった。会員一同その美しさにほれぼれして、この土産物店で、この魅力にひかれっ放しであった。

30日、ハイウエーで最南端懇丁に向かった。ここのニンジンボクの夥しい野生状には驚いてしまった。何キロメートル走ってもニンジンボクとシーザルばかり。これこそ大変な道である。かつて「茨の道」という記録を読んだことを思い出し、A班の方々には、マイクで放送しておいた。会員の皆様も、ちよっとあきれ顔であった。

つづいて懇丁で熱帯植物園を見学する。背高の熱帯植物の色彩などに驚く、中でも印象的なのは盤根の発達したものである。年輪の発達したものでないので、手で打って反応を見た。感、無量というところ。

夕方、トラックの後を、われわれのバスが続いた。トラックの荷台にはアフリカマイマイが山盛りであるので、かつて琉球でのことを思い出し、バナナの害動物で……と車内放送をした。幸いハイウエーは、こんでいて我々のバスと直結の形になったので、交代に生態写真(?)をとった。いま、O氏からその写真をいただいて、当時のことを思い出す。案内人の話では食用するために運んでいるとのことであった。

31日台南から嘉義の道中マンゴウの街路樹が続く、この大きさと、あの美味なものが、よくハイウエーで育ったり、熟するものと感心、とても日本では想像もつかないことである。

待望の阿里山鉄道で登山する。800メートルあたりか

らモウソウチクの藪を見た。直径10センチほどに育っている。この竹材は台湾の高層建築物の足場として最高の人気のものであり、登山鉄道の人家に沿って植えてある。私は台北市でモウソウチクを見たが、万年筆ほどの太さで、たけが1メートルほどであった。暑さには弱いのである。台湾旅行団のうち、何人がモウソウチクを認識したことであろう。

それとあわせて、スギが沿線に植林されている。このスギも同胞の植えたものである。日本の観光団も1人でも、せめて1本でも植える気持ちになって、登山されるよう願った。阿里山鉄道の終点では、珍植物のいろいろを日の暮れるまで見学した。ホテルの庭園では50~60年のソメイヨシノの老木を見て祖先の植林の労を感謝した。

帰途には台北で、熱帯竹の権威林先生の案内で方々を見学した。その中に、夢に描いた珍竹を見つけ、新属のものであると強調したところ林先生の賛成を得た。近しい中に林先生と協同で報告することにして別れた。先生はわざわざ自分の車で飛行場まで送ってくれた。林先生の土産をいただいて感激で胸いっぱいになった。

台湾研修旅行中、マンゴウを各地で味わった。剥皮して口に入れると黄色の肉、行くところで味と形が違うので驚き、尋ねると、何と百余品種もあるとのこと、さらに驚いた。そのほか、皮の薄い小形のキングバナナ、ラフタンバナナを腹いっぱい食って満足した。また、パイア、レイシ、リュウガン、種なしズイカなどをむさばり食った。

在台中は、各種のショウコウ酒、ウイスキーなど、何でも一通り味を見た。友の一人は胃が悪いとかでビールと飯ばかりで過した。友人Kがつくづく可愛想に思えた。

最後に、このプランを1年にわたって練ってくれた当津隆副団長をはじめ、何一つ事故がなくご協力をいただいた参加者ご一同に厚く感謝して終りたい。

企画から出発まで

副团长 当 津 隆

兵庫県生物学会創立30周年記念行事にふさわしい企画の一つが、海外研修ということになって以来、企画部を中心に想を練り、具体案として台湾研修旅行を発表したのは、昨年の夏のおわりであった。常任理事会、理事会の審議を経てやっと実施することに決定、12月15日案内状発送で、いよいよ学会創立以来はじめての海外研修団編成への仕事にふみきった。

理事会での感触は、30名の参加は確実だとも思ったが、メ切ってみるとなんと60名を突破、うれしいが文字通り悲鳴をあげながら大型の企画に練りなおした。5月8日と7月4日の2日間、三宮のトラベラー商会の会議室での旅行団組織、旅行手続、台湾事情の勉強会をひらいた。まだ見ぬ国への旅立ちに興奮をおぼえるのであ

た。

明日はいよいよ出発、61名の大世界の輸送指揮、ハードスケジュールへの不安、研修と観光のかねあい、台風襲来をおそれる気持ち、植物検疫所との折衝の厄介さなど気がかりなことを残しながら、室井团长、藤本副团长との電話連絡をおえたのは、夜11時をとくに過ぎていた。とくに帰途、沖縄経由のグループの旅行計画の微調整には、藤本氏とともに、ひや汗の流しっぱなしであった。

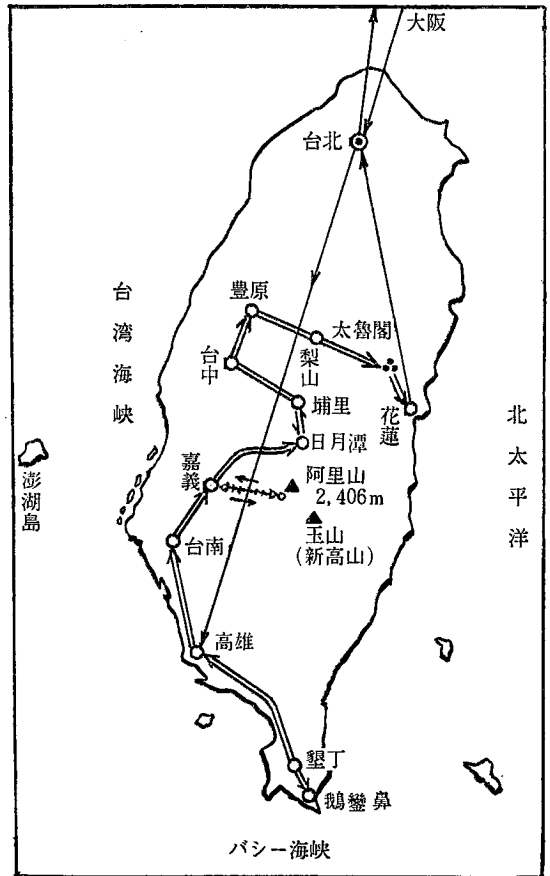
シンボルマークの旗とワッペンをトランクにつめおえたとき、あとは旅行団の無事を祈るばかりであった。

(副团长・県立夢野台高校)

昭和51年 日 程 表

月日(曜)	地 名	交通機関	摘 要・宿泊地
7/29 (木)	大阪 台北 高雄	航空機 航空機	午前、空路台北へ 午後、乗継いで高雄へ 着後バスにてホテルへ 高雄泊
7/30 (金)	高雄 ガランビ 懇丁 台南	貸切バス	朝、高雄発。ガランビ岬まで130km。 途中懇丁熱帯植物園を訪れます。 夕刻、台南着 台南泊
7/31 (土)	台南 嘉義 阿里山	貸切バス 森林鉄道 (光復号)	午前、台南発。嘉義へ1時間。 海拔2,400メートルの阿里山へ 午後着。阿里山上で研修。 阿里山泊
8/1 (日)	阿里山 嘉義 台中 日月潭	森林鉄道 貸切バス 貸切バス	朝、下山 台中へ チョウの産地埔里経由 日月潭へ 日月潭泊
8/2 (月)	日月潭 タロコ 花蓮	貸切バス	台湾を横断 大理石のタロコ峡谷を 通って花蓮へ。 所要約12時間 花蓮泊
8/3 (火)	花蓮 台北	航空機 貸切バス	空路台北へ40分。 午後、台北市内研修 故宮 博物院など 台北泊
8/4 (水)	台北 大阪	航空機	午前、自由研修 午後、空路帰国の途に 帰国手続後、解散

行 程 図



隣りの国へ空の旅

1日目 (7月29日)

7月29日キャセイ航空にて台湾へ。機内で時計を1時間もどして台湾の時間に合わせる。13時過ぎ台北着。高雄までの乗り継ぎ待ちの間に市内に出て両替。1元=8円。再び台北空港に帰りハイジャック防止のため、念入りなボディチェックを受ける。機内持込みは、カメラ、ハンドバッグ、われ物ぐらしか認めてくれない。中華航空CI 277は定刻より1時間遅れて離陸。途中雲ばかりで何も見えない。機は45分ほどで高雄着。車で空港待合室へ。

池田正宏

迎えのバス2台でホテルへ向かう。ちょうど工場の引け時で、広い道に単車がいっぱい。日本と違って左側通行、車優先だから気をつけるようにと、注意を聞く。ホテルは皇都大飯店で2人1部屋。一服して全員で海鮮料理を食べにいった。レストランの入口では魚も売っている。メニューは13品。とりわけ、えびのゆでたのが美味。ビールは口あたりがとても軽かった。帰途、みやげ店による。街は23時過ぎまでにぎわっていた。

懇丁熱帯植物園見学

2日目 (7月30日)

6時モーニングコール、ホテル内でおかゆの朝食をとる。8時過ぎ、A、B班は2台のバスに分乗し、台湾の最南端に向け、ハイウェイを走る。車内は旅行社の林氏から、台湾旅行5つの特徴、台湾の地勢、産業、経済、教育等幅広い解説を聞く。広い道路の両側にはボダイジュ、ココヤシ、モクマオウなどの街路樹が繁り、サトウキビ畑、バナナ畑、水田、ウナギ養殖池などと、そこで働く人の姿が見える。麻竹をはじめ、隆起サンゴの中に点在するシーザル麻など熱帯の植物を興味深く眺めながら、60km南下、鉄道の最南端枋寮駅前、さらに60km南下、城壁の南門が現存する恒春でそれぞれ小休憩。露店でリュウガン、レイシ、リンゴ、ナシ、ウリなどの果物

河瀬勝美

を賞味する。正午ごろガランビ岬に着き、灯台を見て墾丁公園に入る。昼食と自己紹介を終え、くわしくは、台湾省農林庁林業試験所恒春分所が管理する元九州帝大演習林の熱帯植物園の見学となる。800余種が、ヤシ類、果樹類、薬用、染料、油脂、ゴム、香料、繊維の8植物区に分けられている。団長から、刺竹、毛柿、旅人木、茄苳巨木、銀葉板根、縦縞斑入リスホークなど珍しい植物の解説を拝聴したり、石匂宝穴を見た。

フクギ林を出るころ激しいスコールにはじめてあった。3時ごろバスが発車、枋寮、高雄市を経て宿泊地台南市までの180kmを快走し、9時前に台南大飯店に着くというスケジュールで第2日めが終わった。

待望の阿里山へ

3日目 (7月31日)

5時、モーニングコール、5時30分にはバスに乗る。朝食はバスの中である。研修旅行待望の阿里山に登る日である。

台南を出発したバスは、マンゴー・木麻黄の街路樹のトンネルをくぐりぬけて走る。途中、大きな精糖工場がある。ラーメンなどに入れる麻竹の筍を運ぶトラックとも会う。マンゴーの大木の並木はまだ続いている。「北回歸線綜誌」の標塔を車窓からみた。さすが台湾は南の国である。

木材と精糖業の中心地、嘉義に着く。われわれ一行は「阿里山森林鐵路」の「北門車站」でバスを降りる。

白岩卓己

8時、汽車はいよいよ阿里山へ向かって出発、座席指定の光復号である。全長72キロ、嘉義駅と阿里山駅との標高差が2,300メートル、途中の駅が20、トンネルが48、上りにかかる時間は約4時間である。

嘉義北門を出発した汽車はやがて竹崎を経、リュウガンのたわわに実る樹々、クワイズイモ、麻竹などの竹、……の茂る熱帯林を抜けていく。カンナ、ゲットウ、ナンパンギセルに似た紫色のトレニアの花が線路づたいに咲いている。

樟脳駅を過ぎると列車はループを描き、独立山の頂上近くに出る。ここは暖帯林との境である。植樹された

ウメ、カキが目につく。ヘゴ、ヒカゲヘゴ、ヒツジシダ、リュウビンタイなどのシダが群生している。かれんなユリや、なんとなくおもむきのあるベゴニアの花も咲いている。

1400メートル、全線のちょうど中間にあたる奮起湖のあたりから、針葉樹のヒマラヤ杉、タイワン杉が見えてくる。カミヤツデも多い。

十字路駅を少し過ぎた先は温帯林で、植物相も優美になってくる。ピンクのかわいいツリフネソウ、ジギタリスの花が点々と咲いている。空を見上げるような大きな木もみえてくる。

やがて、汽車は樹令3000年以上の「神木」のあるところに着く。この神木は高さ50メートルを越え、直径4.66メートルの巨大なヒノキである。樹皮がやや淡紅褐色をしていることから「ベニヒ」と呼ばれている。(明治34年、松村任三氏、新種として発表)

汽車はスイッチバックをくり返し、2274メートルの阿

里山駅に到着する、迎えの車で宿の「阿里山賓館」へ、それぞれの部屋に荷物を置き、昼食を終えた時はすでに1時半をまわっていた。

午後は、ホテル周辺で自由研修である。2時を少しまわったところ、大部分の人は勇んで出かける。7月から8月にかけて、阿里山の午後は必ずスコールのような雨が降る。ホテルを出て、10分もたつたあたりで大雨が降る。ホテルを出て、10分もたつたあたりで大雨が降る。観察はもちろん、道路を歩くことすらできない。30分以上も降り続いて、小雨になった後、それぞれまた歩きまわる。

貴重な時間を雨で最大限に使えなくて残念だったが、阿里山固有の植物や、屋久島の上部から阿里山へと続く植物など直接観察することができ、満足することができた。

ホテルに帰ってからは、それぞれの部屋で採集物の整理などして過ごした。

埔里にはチョウがいなかった

4日目(8月1日)

藤井清

8月1日(日)午前4時。夜来の雨はあがったらしく満天の星である。5時35分。玉山と雲海の間からの御来光はすばらしい。かん声とシャッターの音が交さくする。

8時15分、螢の光におくられて2274メートルから下山の途につく。植生が温帯林から暖帯林に、熱帯林へと移行し見事である。リュウガンの実が列車すれすれに。ヘゴの群落が谷間に。大樹にオオタニワタリが。特にシダ植物が目立つ。

平均勾配 59/1000、トンネル48の難路も約5時間半で嘉義に着く。(室井団長は日本に帰られるので駅頭でお別れする)

次は、蝶の産地、埔里に向かう。田植(2期)を終ったばかりの田園風景はのどかで農民が水牛にまたがって

通りすぎていく。まさに一ぶくの絵である。田園の間に竹藪(麻竹)が目立ち、今が筍の出荷時期なのだろうか道端に山のように積みあげている。

2時45分。日月潭着、ここで蝶の産地埔里に向かうものと日月潭の散策組に分れる。バスは4時埔里に着く、但し土地の人の話ではこの付近には蝶はいないとの事。川に沿って登っていくと、それでもアゲハ蝶がいる、時間、時期の関係か、ヤブにじっとひそんでいる。

川原の水牛がちょっとこちらをみている。水田にはデンジソウが一面に広がっていた。この付近は戦前サトウキビ畑で日本人の青年技師が栽培に力を入れた所だと人なつこそうな農民が話してくれた。ともかくも一応は目的地にきたことだと納得して6時すぎ無事にホテルに入った。湖畔の夜はしずかであった。

高原野菜の拠点・梨山を越えて

5日目(8月2日)

山崎孝

5日目、8月2日(月)朝もやに立たずむ日月潭。出発前の寸時を惜しんで、カザリシダ、タイワンクジャク、つる性コシダ等を採集する。今日も暑い一日になりそうだ。花蓮までの300kmの山路の旅に期待がふくらむ。8時、ホテル前を出発。ピンロウヤシの木立、茶

畑、二期作の田植え風景や、埔里ののんびりした農村風景が目を楽しませてくれる。マコモの栽培が多い。台中の省立図書館横で小休止。キワダの街路樹を通りぬけて豊原の町にはいる。木材の集散地として有名であり、ピワ、ブドウ等の果樹園の多い所である。

東勢の町から台湾唯一の東西横貫公路にはいる。バスは中央山脈に向かって細い道をのぼっていく。1955年、当時の政策上のねらいもあって延べ500万人、3年10か月を費して完成したという道路である。道路に沿って流れる大甲溪がだんだんと谷底深く見え始め、うっそうと繁る原始林の山々がそびえ立つ。マツ、スギ、ヒノキといった樹林の眺めは大自然そのもの。台湾一といわれる高さ180メートルの達見ダムを左に見下ろして、バスは快調にのぼっていく。海拔1000メートルの地点に青山管制站があり、難所のひとつに数えられ一方通行である。谷を見下ろせば、青々とした水をたたえている大甲溪にしばし見とれる。道路わきの崖には、断層の起こる直前と思われる褶曲された岩肌が見られ感心する。頁岩、千枚岩、粘板岩が多い。

1時前、公路の中間点にあたる海拔2000メートルの梨山に着く。太陽はキラキラと照りつけるがさわやかな高原である。他の観光客も多くにぎやか。視界が大きくひらけ遠くにそびえ立つ雪山(3884m)の眺めに疲れがいちどにとれる。食堂の温度計は25.5℃を指し、涼風が心地よい。火退蛋飯(28元)、蛋花湯(15元)で昼食をすませる。当地は高地民族によって800ヘクタールの耕地がひらかれ、地名のとおり梨の産地である。雄大な山々の斜面に果樹園が広がっている。梨は小粒で、おそらく高地のため大きくならないのだろう。他に高冷野菜や台湾では珍しいリンゴや桃が栽培されている。観光客でにぎわい、スイスを思わせる高山都市は別天地のようだ。梨山をあとにして合歡山のトンネルを出たところが大禹嶺で、海拔2565メートル。公路中、最も高い地点であ

る。原始林と雲海の山なみがすばらしく、大陸的な山容は絶佳である。ここから東側へ下る道は一層けわしさが増し、峻険そのものである。千尋の断崖絶壁に足がすくむ。湧き上がる雲の中をバスはかろうじてはいおりるようにして下っていく。ふり返れば、雲の中に合歡山が雄大にそびえ立つのが見える。何度も突き出た岩のトンネルをかいくぐっていく。今日は天候に恵まれ視界がよい。峡谷の夕暮れは早く、天祥に着いたときはもううす暗くなっていた。

いよいよ、ここから目くらむ大理石のタロコ峡谷が40キロメートルつづくわけである。総大理石造りのみごとな慈母橋を渡り、2億年の浸食を経たと言われる立霧溪を下に見ながら連続したカーブのトンネル。九曲洞である。対岸の大理石の絶壁には、公路工事の殉職212人の霊をまつる長春祠がみえる。白色の大断崖をえぐってつくられた道路には、青の洞門なんか足許におよぼんなあ、と感嘆の声。禅海和尚もさぞびっくりすることだろう。自然の大理石彫刻、大理石の溪流、谷間の木立。夕闇の中で壮厳な感じがひしひしと身につたわってくる。

とうとう一日がかりで太平洋側に出てきた。日はとっぷり暮れて、スコールの降りしきる中をバスは急ぐ。8時ごろ花蓮に着き、宇宙大飯店と嘉西大飯店に分宿することになる。夕食は市内の市場でエビ、カエル、ウナギの料理と台湾ビールで満腹。食事中、隣人に話しかけ「アナタ、タイワン?」「イヤ、ニッポン」。向うから「アナタ、タイワン?」「イヤ、ニッポン」相方も大笑いである。いよいよ台湾ボケである。

故宮博物院で中国王朝文明に感嘆

6日目(8月3日)

この日はモーニングコールも7時と遅く久しぶりにゆっくり眠られるなどと期待していたが、午前4時頃、ホテル下よりのさわがしい声で目をさまされた。窓からのぞくと、道路にずらりと店が並び、人が行き来して朝市が立っていた。

魚や野菜、果物、豚の手足などが無雑作に料理され、天井からぶらさげられて売られていた。頭や耳が台の上ででんと置かれているのには驚いた。

8時すぎ、花蓮空港に向かう、花蓮から30分で台北につく。

植本明子

午後からは専用バスにて市内観光に出発した。国立博物院前で記念撮影後、カメラなどを預け、2班にわかれて入館した。5千年来の歴史を誇る中国歴代王朝の秘宝や文献などにふれた時、その数の多さと共に歴史の深さに一同感嘆の念に打たれた。約3時間ガイドの流暢な説明を満喫し故宮博物院を後にした。

台華大飯店到着後自由行動となり、数名ずつグループを組んで台湾最後の夕食や買い物求めて市内へ出かけていった。

旅のおもいでを抱いて帰国の途につく

7日目（8月4日）

旅行もとうとう最終日を迎えた。

今日はいつもよりやや遅く、7時にモーニングコール。8時に朝食をとった。みんながそろってする食事、これが最後である。中華料理には、ほとんど飽きてしまったが、最後と思うと食は進んだ。

午前中は、自由行動であり、17名は、昆虫科学博物館に見学へと向かい、その他の者は、台北市内観光へと出かけていった。私は後者であったが、蓮の花が真っ盛りの植物園、絢爛豪華な龍山寺、また孔子廟、総統府と、この日初めて、次々と観光地らしい所を見学した。

後で聞けば、昆虫科学博物館は、すばらしかったとか、またと見られないものだったそうで、残念な気がし

小西十四子

たが、清朝の栄華を残す情緒豊かな台北市内を、思いきり散策できたことも、価値があったように思う。

午後になって、みなホテルに帰ってきた頃、6名の先生方は、沖縄へ向かわれるため、私たちより、一足はやく、ホテルをあとにされた。

午後2時に私たちはホテルを出発、5時10分予定通り、キャセイ航空522便にて、大阪へとそれぞれの思いを抱いて帰路についた。

大阪空港到着9時30分、

飛行機の手輪が、滑走路についた時、素晴らしい旅の終わりを懐しむ気持ちがこみあげてきた。

意義深くたのしかった台湾夏の旅

うるわしの台湾、植物の宝庫

橋本光政・最所潤

台湾の印象は何か、と問われれば第一に答えるのは「街路樹がすばらしかったこと」である。その圧巻は何と言っても、高雄からガランビまでの車中、行けども行けども続くモクマオウの並木とココヤシの林立風景であった。嘉義のマンゴウ並木、日月潭近くのユーカリ並木、東西横貫公路のキワダ並木なども、今もって忘れることができない。台湾の道路はのべ700km近く走ったであろうが、その大部分にはすばらしい街路樹があった。

台湾は熱帯圏である。熱帯植物には街路樹以外に、しばしば接することができたが、日本で比較的知られた樹種の他は全く科名すら見当がつかなかった。しかし、阿里山鉄道や東西横貫公路の車窓から見る相観や樹種の変化は長い車の旅をひとときも飽きさせてはくれなかった。阿里山鉄道沿いに「暖帯←→温帯」の案内板を境界として今まで続いていた竜眼や相思樹、そしてピンロウヤシは姿を消し、新たに目をくぎづけにしたのは紫色の花をつけた温帯性の *Leveria* であった。また、東西横貫公路の垂直分布においても、道路わきの植物は合歓山峠をはさんで、樹相に針葉樹がある間は日本と同種や同属の植物が多かったが、それ以下では全く見当がつかない初めてのものがほとんどを占めていた。

生物学会初めての海外研修には苦い経験も含まれていた。それは植物検疫に労した時間と不安であった。台北を出発する日の午前中、検疫を受けるため半日を要し、検疫所では1枚1枚、全ての標本に目を通された。ま

た、その後、ホテルに帰って、新聞紙では通らないとの不安から全ての標本をわざわざ白紙を買ってかえた人もあったほどである。

台湾でその味に舌つづみを打ち、その果実のなった生態もあちこちで観察して帰ったのは竜眼である。生の果実は持ち込み禁止とは聞いていたが、食べた後の種子を持ち帰り姫路で植えてみた。何とうれしいことか、その芽が出たのである。即ち、台湾での研修の成果が早くも芽を出したのである。旅行団の全員が今回の研修旅行で見た熱帯の樹種や植相は今後の授業や研究に必ずや活かされることであろう。竜眼の苗を育てる気持ちでこの貴重な経験を結実させたいものである。

ショッピングあれこれ

この旅行は研修旅行であったが、それもさることながら楽しみの一つは何と言ってもショッピングであった。家族や友人へのお土産か、それぞれ思いをはせてショウウィンドウをのぞき、相談したり考えこんだり。どこの街でも観光客相手、特に日本人相手の店が建ち並び、店員もカタコトながら日本語で愛想良く応待する。

しかし店員の口車に乗ってあっさり買わないのがコツ。（高価な品は特に）定価の3割～5割まで値切って当然とか？。まさしく客と店員との涙ぐましい価格論争である。そして、相当値切ったつもりが、後になって考えてみると、実はそうでもないらしい。しかし日本で買

うよりは割安であることは確かである。

特筆出来るものを挙げてみると先ず、台湾ヒスイ、珊瑚などの宝石類、装飾品、花蓮の大理石それから牛角、べっ甲細工、日月潭の蝶の標本、嗜好品として、ウーロン茶、桜花菜、乾燥肉、紹興酒、台湾タバコ等、数えたらきりが無い。

最後に、免税店では、舶来品、特に酒が安く買えるとあって、台北空港では皆あちこちを忙しく買い物に歩き回った。8月4日夜、皆両手いっぱいの荷物、そして旅の思い出を持って、伊丹空港に到着した。

台湾料理に魅せられて

本場の中華料理を食べられるとあって、大いに楽しみにしていたが正にその通り、日本では味わえない美味、珍味に舌つづみを打った。特に中でも海辺活海産店でのエビ、魚、貝類を使った海鮮料理は出色であった。ただ中華料理はどれも香辛料のせいとか又、油っこいせいとか日の経つにつれて少々皆飽きが来たようすであった。

一つ驚いた事に朝食は必ずオカユである。お国が違えば品も変わるの念をひしひしと感じた。また夜の街を歩くと、いたる所に食べ物の露店が軒を並べ、家族連れであろうか、あるいは友達どうしなのか、多くの人々が食事を楽しんでいる。晚御飯なのであろうか、それとも夕涼みの途中に寄ったのであろうか、この様な光景が夕方から11時近くまで続くのである。夜が長く、他にこれとって娯楽のない庶民にとって食べる事、これすなわち最大の楽しみなのであろう。ただ気になるのは、この暑い国にもかかわらず生の肉や魚などが無雑作に並べてある事である。衛生状態は良好とは聞いて来たが果たしてどうなのか。

さてこの旅行中毎日三度の食事でもずらしく食べたものには、豚肉デンプ、乾燥牛肉、豆皮、カラスミ、パー

ベキュー等限りがない。

また果物ではリュウガン、パパイヤ、ウリ、マンゴー等、香りの高い風味は南国台湾ならではのものであった。そして酒は紹興酒。蝶の里、埔里の清水でつくられたこの酒は、なかなかの味である。ビールはあっさりして飲みやすい。

ただ一つ残念なことは、露店などで土地の人々と一緒に食事が出来なかったことである。

参加者名簿

室井 綽	当津 隆	藤本 義昭
東 勝義	家永 善之	池田 正宏
石田 操	井上 昌	植本 明子
上田 稔	内波 秀一	岡村 はた
大江 雅	大坪 正吾	大場 義憲
笠原基知治	河瀬 勝美	神部 彰夫
櫛橋 行雄	児島 哲郎	小西佳世子
小西十四子	近藤昭一郎	佐々木誠太郎
最所 潤	西条小百合	清水 丈三
白岩 卓己	新崎 哲弘	新崎 弘典
関灘 知子	田中 英徳	高田 敬三
高見 尚美	竹内 広志	竹田 妙子
谷口 博	内藤 茂樹	西村謙之助
萩本 公一	浜口 隆	平畑 政幸
藤井 清	藤田 保之	春名 利雄
増田 恵美	町口 篤弘	松本 幸重
丸尾 耕夫	森井 しゑ	山崎 孝
山根 芳二	横谷 義男	森本 実
安木 五夫	安木 国子	若菜喜代子
田中順太郎	橋本 光政	道盛 正樹
東 敏男	辰己 克之	高田 陽一